

サンワ・リノテックがお届けするお得な記事満載の情報紙。 きっとお役に立ちます。

ユーザー様訪問



サンワ・リノテック株式会社
代表取締役
佐川 博敏氏

株式会社 アレス
特建営業部 部長
水江 清一氏

今回はサンワ瓦版を発行しているサンワ・リノテック(株)の佐川博敏社長の登場です。佐川社長は本業のかたわら「文化財の保存・修復活動」「世界遺産を巡り地球を駆ける」という壮大なロマンと夢を持っています。その一環としてこのほど(2012年10月22日~26日まで)米国・ニューヨーク州コロンビア大学で開催された国際会議「ストーン2012」「石文化財の保存と劣化に関する国際会議」に出席してきました。

以下、国際会議の概要、米国見聞旅行の報告などを中心に紹介します。

まず佐川社長のプロフィールを紹介すると、1969年、大阪大学工学部石油化学科に入学。1973年、交換学生としてノルウエーのオスロ大学で2ヶ月間研究・滞在し、その後バックパッカー(リュックを背負って旅行する人)としてヨーロッパを2ヶ月間放浪しました。1975年、スイス系総合化学会社(旧チバ・ガイギー)に就職し、通算4回スイスに海外出張しました。1986年、お父さんが創業したレンタル・塗装用品販売会社に入社し、現在社長として活躍されています。

社名の由来は、先代からのサンワ(昭和30年創業)とRenovation(修復)+Technology(技術)でサンワ・リノテックとしました。

建築物の修復だけでなく、建設業全般にわたるRenovationの一翼を担うという考えで日々活動されています。アスベスト対策工事にかかわるビジネスはその典型で、同社が経営理念とする「環境」に合致します。

もうひとつの修復のテーマは文化財の保存・修復活動です。佐川社長は歴史的建造物を後世に伝えることに貢献したいと考えており、これまで修復技術・工法の開発で実績を残してきました。チバ・ガイギーに勤務していた頃、自社開発品の接着力・耐久性に優れたエポキシ樹脂が広島の大原爆ドームの補修に採用されました。以来チバ・ガイギーを退社後も文化財保存に関しては現在も国立文化財研究所等の交流も続いており、発掘後の埋蔵文化財の保存処理に於いてはパイオニアである。同じ元チバガイギーOBのアイ・エヌ・テクニカルラボ井上社長のもと、有名な三内丸山、秋田の大湯環状列石、奈良大野寺磨崖仏等に参加、保存修復を手懸けました。

1998年に行ったイースター島のモアイ像保存修復はその中でも最も大きなイベントでした。この事業はチリと日本の文化庁との

共同契約の下に行われその後ユネスコの世界遺産に認定されました。また、ヒロシマ、スイス、ヨセミテ、イースター島、アウシュビッツ、アンコールワット、キュラソー、インドなど世界遺産を数多く訪問し、造詣を深められています。

国際会議に出席することも文化財の保存・修復活動の重要なテーマです。2008年にポーランドのトルンにあるコペルニクス大学で行われた前回の会議にも参加しています。今回のコロンビア大学で開催された「ストーン2012」この国際会議は、オリンピックと同じく4年に1度開催され、今回が12回目でした。大学はマンハッタン島にあり、セントラルパークから車で約10分のところに位置しています。いわゆるアイビーリーグに属するアメリカの古くて有名大学のキャンパスには、歴史的な建造物がたくさんありました。特にギリシャのコリント様式の重厚な建物にはホメロス、ヘロドトス、ソポクレス、プラトーン、デモステネス、アリストテレスなど8人のギリシャの哲学者・詩人の名前のレリーフがある法律学部の建物が印象的でした。同じく重厚なギリシャ風建造物の図書館で国際会議の歓迎レセプションが開催されました。

会議には30ヶ国から319人が集まり、ヨーロッパ200人、USA70人、アジア圏29人、その他20人の内訳でした。学生はそのうち59人でした。建築家、化学者、薬学、医師などいろんなジャンルの人達が参加されており、この国際会議は修復した文化財の事例を具体的にまた実用的に口頭発表とポスターセッションで発表されました。1人約15分の持ち時間で、70の口頭プレゼンテーションと69のポスターセッションがありました。口頭発表ではスミソニアン博物館からの修復工事の発表があり、工事のbefore、afterが写真などを使って分かりやすく説明されました。

会議の最終日は会議者主催のツアーでした。コロンビア大学キャンパス、メトロポリタン美術館、自然史博物館、MOMA(ニューヨーク近代美術館)見学などが含まれていたため、ニューヨーク大学(NYU)保存科学部ツアーに参加しました。

保存科学のプロを対象としたツアーだったので、熟練技術者でもある研究者が作業している修復室や博物館での陳列のための光の研究など、いろんな分野の研究をそこではつぶさに見学することができました。また、同大学の中でも保存科学部は、特に学生に人気があり入学の倍率が難しいそうです。(裏面に続く)



(表面より) 今回の「ストーン2012」には(株)アレス(本社・大阪市)特建営業部の水江清一郎部長も同行されています。水江部長は前々回のスエーデンの文化センターで開催された国際会議にも出席され、ストーン会議出席は2度目でした。同社は、建築の新築工事の施工をしながらインベーションの仕事も手がけておられ「欧米では古い建築物を美術館、博物館、劇場などに再生・利活用した事例が多く、今後日本の建物のストックを考えると非常に勉強になる」ということです。また、佐川社長もケミストとして化学的なアプローチや、修復のためのリース機械を研究されており、世界の修復機械の情報を集めておられます。ワークショップでどのような機械を使って直しているか、その事例が紹介され参考になったそうです。

佐川社長はニューヨーク訪問は2回目ですが、35年ぶりなので自由の女神しか記憶がなく、ほとんど初めてと同じでした。非常にダイナミックな都市だという印象を改めて受けられたそうです。会議出席前、ボストンを訪問。日本人を対象にした現地ツアーに参加。アメリカの故郷と言われるボストン近郊のプリマス「開拓村」を訪れました。場所はボストンの南約100キロのところにあります。1620年、清教徒がイギリスのプリマス港からメイフラワー号に乗って66日をかけて到着した、そのとき降り立った踏み石が設置・保存されていました。開拓村では、かやぶきの家があり、当時住んでいた状態を居住区ごと忠実に再現されていました。

ガイド(説明員)は当時の服装を着て、当時の食生活を観光客に見てもらおうと食事を作っています。農作業・大作業をそのままに、説明は昔の英語(?)を使って話すという徹底振り。先住民のインディアンともこの地では共存していたというのも初めて知りました。アメリカはたいした歴史はないと思っていたそうですが、開拓村で400年前の歴史を見学して認識が変わったということです。その後アメリカは独立しましたが、その戦争にいたる歴史や南北戦争についてもボストン市内にはたくさんの博物館や建造物が大切に保存され、街中いたるところで案内人が海外からの訪問者だけでなくアメリカ国内の旅行者も引率していました。

ニューヨークではメトロポリタン美術館を訪れました。館内は東洋美術を始めテーマ毎に数多くの部屋に分かれていました。エジプトの部屋ではエジプトから運んだ本物の石が置いてあり、自然史博物館では恐竜の化石が展示されていました。美術館では写真撮影もOK。デッサンで模写をしている人もいたそうで、日本とはえらく違うと感心したそうです。

10月にハリケーン「サンディ」がニューヨークに上陸しました。佐川社長はハリケーンが到来する前日に出発したので影響はありませんでしたが、ニューヨークでは停電になり、広範囲の地域が浸水に見舞われ、洪水で地下鉄が4日間ストップしました。遅れた人達は4日間足止めを食らったそうです。

後日、この学会で友達になった人から「ニューヨークはえらいことになっている」とメールが届いたそうです。それによると美術品の修復学会は、すぐにコンソーシアム(連合)を組んで、大洪水で被害を受けた美術品の修復を行う団体を設立しました。ニューヨークの美術館や大学の人達がチームを作って活動を開始したということです。またAICという機関は、24時間体制で美術品の保存修復に関する電話対応をしていたそうです。



また、浸水した建物に入って美術品などを探さなければいけない場合、注意事項が発表されました。リスクの高いものとして1番目にアスベストが挙げられています。2番目が鉛、3番目が病原菌、その他引火性危険物、電気(感電の危険がある)、ガス、一酸化炭素などとなっています。そうした指示をすぐ出すアメリカの危機管理のリアクションはすごいと感心したそうです。この考え方は日本でも大いに参考にすべきだと痛感し、今回のアメリカ旅行の大きな収穫だったということです。

今回旅行に同行された水江部長は、勤務先で文化財の保存・修復の仕事で施工を担当し、サンワ・リノテック(株)は薬剤や機械関係を提供するという協力関係にあります。2012年に、両社は京都のレンガ造りの西本願寺伝道院の修復工事に参加しました。施主は西本願寺で、竹中工務店が工事を請けました。伝道院は西洋風の煉瓦造りに和風やイスラム風などのデザインを取り入れ、東西文化が融合した様式が採用されています。

水江部長の話によると、明治以降日本は欧米の技術を取り入れた建築物に変わりました。約100年経ってそれらの補修が新たに登録文化財や重要文化財のリストに載ってきているようで、現在文化財的建造物の数は大小含めて2万棟位あるそうです。

しかしその補修法は確立されていないのが現状で、修復方法や改修工法の開発は新しいジャンルとして期待が持てるということで、そうした点からも保存・修復に関する国際会議に出席することは非常に意義があるということです。

佐川社長は、「文化財の保存・修復活動は社会貢献となる。個人的な楽しみも含めて今後もライフワークとしてやっていきたい」とと壮大なロマンと夢に心をときめかせています。

編集後記

今回は、弊社の佐川より、アメリカ・ニューヨーク州コロンビア大学で開催された「ストーン2012」に、(株)アレス水江部長と出席した内容を特集しました。

主に、文化財の保存や歴史的建造物の修復活動等に携わった事例等をわかり易く解説してもらいました。

もともと佐川は文化財の保存や修復活動に参加して、歴史的建造物を後世に残したいとの思いで、日本はもちろん海外の世界遺産を数多く訪問してきています。特に印象に残った事、アメリカの危機管理のリアクションの早さ等多岐にわたり報告してもらいました。(文責: 寺嶋)

発行

作業現場の快適のために——
レンタル、販売から工事施工まで

Sanwa Renotech

サンワ・リノテック株式会社
www.sanwa-renotech.com

アスベスト サンワ で検索できます

〒551-0033 大阪市大正区北恩加島1丁目17番4号
TEL06(6551)0024 FAX06(6554)1057
東京営業所 〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-16-2-702
TEL03(6912)8292 FAX03(6912)8293